

第50回

# いのちの電話 シンポジウム

テーマ

## これからのいのちの電話 ～変わりゆくもの、変わらないもの～

入場  
無料

2026年

日時

7月11日(土)

13:00～開 場

13:10～アトラクション **音楽ライブ** ナイトdeライト

13:30～16:30 シンポジウム

シンポジスト「いのちの電話の応援団」

衛藤 暢明氏 [福岡大学医学部精神医学教室講師、  
福岡いのちの電話評議員]

稲村 茂氏 [メンタルクリニック秋田駅前  
秋田いのちの電話理事長]

田辺 等氏 [北海道精神保健協会会長、  
北海道いのちの電話研修委員長]

杉本 明氏 [北海道いのちの電話事務局長]

[進 行] 大宮秀淑氏、河岸由里子氏(北海道いのちの電話研修委員)

会場

札幌コンベンションセンター  
(第1会場)

札幌市白石区東札幌6条1丁目1-1  
<https://www.sora-scc.jp/>

主催 一般社団法人日本いのちの電話連盟、社会福祉法人北海道いのちの電話

共催 一般社団法人日本自殺予防学会

参加のお申込みについて

準備ができ次第、北海道いのちの電話ホームページでご案内いたします

ご連絡・お問合せ

北海道いのちの電話・事務局 TEL 011-251-6464 FAX 011-221-9095

お申し込みはこちらから



## これからのいのちの電話 ～変わりゆくもの、変わらざるもの～

いのちの電話は、1971年に東京で始まったが、チャド・バラーが1953年にロンドンで始めたサマリタnzの運動をモデルとしたのは周知のとおりである。

当時は、1960年代以後の政治・経済の激動期にあり、都市化していく社会での孤独、自殺などの問題が注目されだしていた。政治運動や社会運動が激しさを増し、そのピークを迎えて徐々に下火になる中で、若者の自殺に関わるドキュメンタリーや小説が出版され、ベストセラーになるものもあった。このような時代背景の中で始まったいのちの電話の活動は、70年代から80年代にかけて日本の各地に広がっていった。

その後、1998年頃に、わが国の人口統計で自殺者数が急増した。自殺者数は年間3万人を超え、2006年に自殺対策基本法が制定された。その後、20年を経る中で、現代は国の自殺予防対策費のバックアップを受けた種々の相談支援活動が増えてきた。

とはいえ、自らの悩みやこころのうちを匿名で相談できる電話相談として、いのちの電話が、この50年で果たしてきた社会的な役割と価値には、ゆるぎないものがある。時代の要請に応じて、ナビダイヤル、フリーダイヤルを導入し、一部ではインターネット相談も行っている。

しかし他方で、電話がつながりにくいという批判があり、相談員の減少問題、高齢化問題も深刻になってきている。そして、意図的な相談員ハラスメントと思われる性的内容の電話や、攻撃的な言辞をあげせるだけの“相談”も増加し、相談員を困らせる問題が増加している。

現代社会は、意思疎通、コミュニケーションの手段自体が大きく変化し、インターネット、SNS使用が一般化し、AIの活用も急増した。社会の中では、人と人とのコミュニケーション手段として、1対1の電話での対話という方法自体が主流でなくなりつつある。そのようなコミュニケーション手段の変化の中で、SNSでの誹謗中傷や集団いじめの中で自殺に至る若者もあり、若年世代での自殺数は減少していない。

このような時代認識の中で、本シンポジウムは、現代社会でのいのちの電話の意義を確認し、何ができそうか、何が難しいのか、これからの活動の在り方などについて、意見を交換し想いを共有する時間としたい。